

R. BU NÖR
A.M.CASSANDRE

DEUTSCHE REICHSBAHN G.E.S. = POLSKIE KOLEJE PAŃSTW

深夜特急

新潮社

沢木耕太郎 第一便 黄金宮殿



太郎 第一便 黄金宫殿 夜特急

新潮社

深夜情急

第一便 黄金宮殿

印刷——一九八六年五月二十日

発行——一九八六年五月二十五日

定価——一二〇〇円

著者——沢木耕太郎

装幀——平野甲賀

装画——カッサンドル

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

所在地——162 東京都新宿区矢来町七一

電話——業務部(03)二六六—五一—
編集部(03)二六六—五四—

振替——東京四—八〇八

印刷所——二光印刷株式会社

製本所——大口製本株式会社

© 1986 Kōtarō Sawaki, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛にご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-327505-7 C0026

深夜特急・第一便・目次

第一章 朝の光

発端

7

アパートの部屋を整理し、引出しの中の一円硬貨までかき集め、千五百ドルのトラベラーズ・チェックと四百ドルの現金を作ると、私は仕事をすべて放擲して旅に出た……

第二章 黄金宮殿

香港

29

黄金宮殿という名の奇妙な宿屋に放り込まれた私は、香港中を熱に浮かされたように歩きまわり、眺め、話し、笑い、食べ、呑んだ。香港は毎日が祭りのようなようだった……

第三章 賽の踊り

マカオ

101

香港の喧噪と熱狂を離れ、息抜きにマカオに立ち寄った私は、^カ大小^クというサイコロ博奕に魅せられていった——。やろう、とことん、飽きるか、金がなくなるまで……

第四章 メナムから

マレー半島 I

167

オートバイはマフラーをつけずに走り廻り、タクシーは爆音を残して発進し、バスは絶え間なく警笛を鳴らす。バンコクは東京よりも香港よりもけたたましい街だった……

第五章 娼婦たちと野郎ども

マレー半島 II

217

マレー半島を南下してゆく途中、私はベナンで娼婦の館に滞在した。女たちの屈託のない陽気さに巻き込まれ、ピクニックに出かけたり、ヒモの若い衆と映画を見たり……

第六章 海の向こうに

シンガポール

287

シンガポールに着いて、『香港の幻影』ばかりを求めて旅していたことに気がついた。今は、中国文化圏に属さない国の、強烈な臭いのする街へ急ぐべきなのかもしれない……

深夜特急・第二便・目次

第七章 神の子らの家

インド I

第八章 雨が私を眠らせる

カトマンズからの手紙

第九章 死の匂い

インド II

第十章 峠を越える

シルクロード I

第十一章 柘榴と葡萄

シルクロード II

第十二章 ペルシャの風

シルクロード III

深夜特急・第三便・目次

第十三章 使者として

トルコ

第十四章 客人志願

ギリシャ

第十五章 絹と酒

地中海からの手紙

第十六章 ローマの休日

南ヨーロッパ I

第十七章 果ての岬

南ヨーロッパ II

第十八章 飛光よ、飛光よ

終結

深夜特急

第一便 黄金宫殿

ミッドナイト・エクスプレスとは、トルコの刑務所に入れられた外国人受刑者たちの間の隠語である。脱獄すること
を、ミッドナイト・エクスプレスに乗る、と言ったのだ。

第一章

朝の光

発端

ある朝、眼を覚ました時、これはもうぐずぐずしてはいられない、と思つてしまったのだ。
私はインドのデリーにいて、これから南下してゴアに行こうか、北上してカシミールに向かうか迷つていた。

ゴアにはヒッピーたちの楽園があると聞かされていた。それがどのような種類の楽園なのかは定かでなかったが、少なくとも、輝くばかりのゴアの海沿いの土地では、デリーやカルカッタの何分のかの金で楽に暮らすことができるという話に嘘はないようだった。

一方、カシミールはインドの高級避暑地でもあり、ゴアのような安上がりな生活は期待できないが、なによりも、雪を頂いたヒマラヤの高峰群を間近に望むことができるというだけで心ひかれるところのある土地だった。

〈黄金のゴアにしようか、それとも白いカシミールにしようか……〉

私は迷いながら、しかしいつまでもその迷いを宙吊りにしたままデリーにとどまり、その日その日を無為に過ごしていた。

日本を出てから半年になろうとしていた。

アパートの部屋を整理し、机の引出しに転がっている一円硬貨までかき集め、千五百ドルのトラベラーズ・チェックと四百ドルの現金を作ると、私は仕事のすべてを放擲して旅に出た。

私にとって、千九百ドルという金はかなりの大金に思えたが、実際に使いはじめると減るのは速かった。たとえどんなに貧しくつましい旅をしていても、腹が空けば何かを口に入れ、夜になればどこかに泊まらなくてはならないのだ。しだいに薄くなっていくトラベラーズ・チェックを、一枚、また一枚と切るたびに、果たして俺はあとどれくらい旅を続けられるのだろうか、と不安を覚えるようになっていた。

しかし、私がその朝、もうぐずぐずしてはいられないと思ったのは、必ずしも金が理由ではなかった。デリーはニューデリーとオールドデリーの二つの地域から成るが、私が泊まっていた宿はニューデリーの鉄道駅の裏手に広がるメイン・バザールの一角にあった。人の流れの激しい、猥雑で活気のある通りに面しており、周囲には、雑貨屋、履物屋、生地屋、錠前屋などが立ち並んでいた。

香辛料を商う店からは、金盞のような容器に山盛りにされた赤唐辛子やターメリック、あるいはナツメグ、黒胡椒、コリアンダーといった数十種の香辛料が放つ強烈な匂いが複雑にからみあいながら漂い出し、それがバザール全体を覆いつくしていた。匂いは宿の中にも流れ込み、私の部屋の壁や天井やベッドにさえも沁みついていた。

私の部屋、といってももちろん個室ではない。ドミトリイ、つまり大部屋だ。外の通りと地つづきの土間に、インド式のベッドが十ほど無造作に並べられている。要するに、どうにか雨露がしのげ、土の上で寝なくてすむ、というだけの宿なのだ。しかし、一泊四ルピー、およそ百四十円というデリーでも極めつきの安宿に、さほど多くを期待する客がいるわけでもない。

宿の親父は、通りに面した出入口に置いてある壊れかかった机の前に坐り、日がな一日ぼんやりと人やりキシヤの往来を眺めている。客はその親父に四ルピーの金を渡し、空いているベッドに身を横たえる権利を得る。宿には、そのようにしてベッドひとつ分の空間を自分のものにした若者たちが、これもまた一日中なにをするでもなくゴロゴロしていた。

ドイツ、フランス、オランダ、イギリス、アメリカ、そして日本。それぞれ国籍や肌の色は違っても、誰もが嬉々として観光名所を巡るにはあまりにも長くインドにすぎた旅行者だということに変わりはない。食事をする時にぶらりと出ていくくらい、そして帰ってくると自分のベッドの上でハシシを吸うくらいしかすることがない。バザール近辺の安食堂なら一食五、六十円で腹を満たすことができる。つまり、一ドルあれば、どうにか一日が過ごせるのだ。

デリーばかりでなく、カルカッタでも、ベナレスでも、ネパールのカトマンズでも、最下級の安宿には、一ドル前後で暮らせる生活に身を浸し切り、重い沈溺物のようにベッドから動かぬ若者が数多くいた。あるいは、私もまたそうしたひとりであったかもしれない。

このデリーの安宿は、カトマンズの一泊七十五円というような途方もない安さには及びもつかなかったが、居心地は悪くなかった。ここにほんの一晚か二晩泊まるだけで、翌朝には元気に次の目的地に向かって出発していくといった旅行者でもないかぎり、他人にうるさく構おうとする気力を残している宿泊者はほとんどいなかった。自分から話し掛けなければ誰からも話し掛けられず、外部からはまったく切り離されたひとりだけの時間を過ごすことができる。そのようなある種の無重力状態は、刺激もないかわりに奇妙な安らぎがあった。

たとえば朝、ベッドの上で眼を覚ますと、今日一日どうしようかと考える。考えても何も思い浮か

ばないので、再び眼を閉じ、そのままの姿勢で横になつてゐる。やがてそのうち、周りのベッドの連中が、ひとり、またひとりと起きはじめ。しばらくして、私もベッドから体を起こし、着古して薄汚れてきたピジャマとクルタを身につける。

起きたからといって急にすることが見つかるわけでもないが、とにかくベッドの傍から離れ、宿の外に出て表の通りを歩きはじめる。まず行くのは近くのチャイ屋だ。

チャイとは茶、インドでは紅茶をさす。インドの紅茶は、イギリス風の気取った飲み方をするものではなく、紅茶と砂糖と牛乳を鍋に叩き込み、煮立ったところで茶漉しを通して器に注ぐという、粗野だがこつてりしたミルク・ティーがほとんどだった。私は、乏しい金をいくらでも儉約するために朝食を抜き、かわりにチャイを一杯だけ飲むことにしていた。

馴染みになったチャイ屋の親父は、バケツにはった水をくぐらせただけで洗ったコップを受け皿にのせ、そこに溢れるほど注いでくれる。まず受け皿にこぼれたチャイをすすり、それからコップに口をつける。熱すぎる場合には受け皿に少しずつこぼし、さましながら飲む。インドではそうした一杯がアルピーの五分の一、二十パイサか三十パイサほどだった。私は僅か七、八円のそのチャイを、インドの暇人と一緒に時間をかけてでする。

だが、いくらゆっくり飲んだとしても、それで一日が終るわけではない。時計を見るとまだ九時にもなっていないのだ。そこで、再び、表通りに出て歩きはじめる。

陽はすでに高く、熱気がねつとりと体にからみついてくる。そして、目的のない足は自然にコンノート・ブレイスに向かつてしまう。

コンノート・ブレイスはニューデリーでも最も繁華な場所のひとつであり、そこへ行けば何かしらに出喰わすことになる。面倒なことにもぶちあたるが、退屈しのぎにもなる。コーヒー・ハウスを覗

けばどんな国の旅行者でも見つけられたし、ロータリーになっている周囲の通りを流して歩けば、闇ドル買いや偽航空券売りのひとりや二人は必ず声を掛けてくる。そんな誰かの相手をしたり、商店のいくつかを冷やかして歩いていると、どうにか昼になる。

私は駄菓子屋でコッペパンのような素朴なパンとポウリングのピンのように大きくて太い牛乳を一瓶買い、近くの公園の木蔭へ行く。そして、鈍重な動きでうろろしている野良牛を眺めながら、これもまたゆつくりと昼食をとる。だが、まだ一時だ。仕方なく、今日の午後は国立博物館にでも行ってみようかと思う。

館内に入り、何千、何万の人の掌によって撫でまわされたため、出っぱった腹に妙な艶の出ているクベラ神の像を眺め、気に入っている細密画を眺め、古色蒼然たるジャイナ教の経典を眺めると、何度目かのこの博物館に見たいものがなくなってしまう。

休憩室でチャイを飲み、六十五パイサで買ったアエログラムに誰にともなく手紙を書きはじめる。しかし、冒頭の一行を書くと、もう別に書くことがないことに気がつき、途中でやめてしまう。

帰りは少し疲労を覚え、宿の近くまでバスに乗る。超満員のバスにどうにかもぐり込み、辛じて片手で手すりを掴み、振り落とされないように必死でしがみつく。降りると、さらに疲労が激しくなっているのに気がつき、思わずひとり苦笑してしまう。そこで、バザールの入口でささやかな店をはっているジュース屋に寄り、マンゴーをしぼってもらう。私にとっては、一日のほとんど唯一の贅沢が、この夕暮れに飲むジュース一杯であることが少なくなかった。

宿に戻り、ベッドの上で少し休み、陽が沈んでいくらか涼しくなりかかった頃、バザールの食堂に夕飯を食べに行く。

決まって食べるのは七十円ほどの定食である。一枚の大皿の上にすべてがのっかっている簡単なもの

のだ。カレーというよりは野菜の煮込み汁といった方が理解しやすい主菜と、チャパティか米飯。あとは、日本の一膳飯屋の定食でいえば味噌汁にあたるダール、沢庵のような役割を持つ生タマネギの切れはし、それにヨーグルトというよりは乳酸飲料に近いダヒーなどがついてくる。

とにかく、そのようにして眼の前に置かれた一日の最初にして最後の豪華な正餐を、まず眼に与え、次に右手の三本の指に味わわせ、それからようやく舌の上に運ぶ。

食事が終ると、もう眠ることしか残っていない。宿に帰ってベッドの上でぼんやりする。やがて夜が更け、周りの連中がそれぞれに寝る仕度を始める。木の枠に網を張っただけのインド風ベッドに、思い思いの格好で横になる。昼間の服のままで眠る者、シーツ一枚を体に巻きつけて眠る者、バスタオル大の布をかけて眠る者。だが、多くは寝袋を敷き、その中にもぐって眠る。外と木の扉一枚でしか仕切られていないこの部屋は、早朝かなり冷え込むのだ。

私もやはり網の上に寝袋を敷き、裸になってその中にもぐり込む。他の連中もほとんど裸になるが、バスポートと現金だけは、パンツの中にしまったり、首から吊るした皮袋に入れたりして、しっかりと抱いて寝る。それは同室者を疑うとか疑われないとかの問題ではなく、あとでごたごたしないための、ドミトリー暮らしをする者の最低限のエチケットといつてよかった。私もまた大事なものを胸に抱くと、ハシシをやりすぎた男のキキキというような笑い声を聞きながら、いつもと変わらぬ、あまり快いとはいえない眠りにつくのだ……。

その日、眼を覚ますと、表の通りでは早朝の喧噪が始まっていた。インド人の朝は早い。それはこのバザールも例外ではなかった。七時前というのに、人々が往きかい、舗装のしてない路面からは土埃が舞い上がる。そこを朝陽が強烈に射抜いて部屋に差し込んでくる。光の中で埃がキラキラと輝き、